Scenario：月見
Illust：リョウゲツ
月村柚羽の都市伝説
【PDF小説】

「はぁ……はぁはぁ、ユワぁ……んんっ……アタシ達がこうして縛られるのって、お姫様が悪い人に捕まってるみたいに見えるかなぁ……結構苦しいんだけどね……」

「ふふ……そうだね、んくっ……はぁはぁ。でも王子様は助けに来てくれないからさ……んんっ、もう少しで……んぁっ……解けるから、が、がんばろうヒナ」

私達は、お互い拘束されなんとか脱出しようともがく。

このお話は今より数時間前に遡る。

【月村柚羽の都市伝説】

それはある地域の都市伝説。
それはある街の一角存在する廃墟の噂。
いわくそこには物の怪の住まいである。
いわくそこには物の怪によってさらわれた女性が囚われている。
いわくそこには立ち入ってはいけない……。

元川の廃墟へは立ち入ってはいけない。

―――――――――――――

「ねぇねぇ!! あそこの廃墟にいるっていう怪しいヤツの写真を撮ってやろうよっ!!」
友達のヒナ……天乃橋 雛（あまのはし ひな）は、いつも元気だ。
今日はヒナと街で遊んでいた。

美味しいものを食べたり、お店を回ったり、それはいつも通り楽しい時間だった。

少し疲れたため、手頃なお店でお茶を楽しんでいるとヒナは玩具を見つけた子供のように目を輝かせていた。

彼女の持った携帯端末に映し出されていたのは、とある廃墟の写真。それは私にとってもそれなりに見慣れた物ではあった。

元川集合地区。住宅・商業・工業・公共施設を一定の区画にまとめようとした実験地区。

私が物心ついた時には、それはすでに廃墟だった。最近になりようやく再開発の話が出てきたばかりだ。ただ、それと同時期にある噂話も表沙汰になってきた。

いわくそこは物の怪の住まいである……と。

都市伝説にしても安直（チープ）な物である。私は興味の欠片もなかった。

しかし私の愛すべき親友は、この手の話が大好きなようだ。すでに行く気に満ちている。

「ヒナ……本当に行くの？　一応あそこ立ち入り禁止区域だよ？」
「何言ってんのよ、だからいいんじゃない!!　ねぇ行こっ、アタシがいるから怖くないよっ!!」
「そういう問題じゃないんだよ、ヒナ」
先に席を発ったヒナを追いかけるように、私は残りのキャラメルマキアートを煽り、足取り重く着いていく事になった。

「ルンルンルン♪」
陽気に鼻歌が交じる彼女。
明るい金髪に近い茶色の髪がフワフワと揺れ、腰に巻いたカーディガンも合わせて揺れる。
足元のルーズソックスもヒナの雰囲気ととても合う。人目を引く彼女、いらぬ誤解を受ける事もあるが私は彼女をとても好ましく思う。
「ん、ユワどーかしたの？」
「ううん、なんでもないよ」
ユワ……月村　柚羽（つきむら　ゆわ）は私の名前。

「へっへっへー、相変わらずユワの制服姿は可愛いですなぁー。ベスト可愛いし、ほっそり足にニーソが似合うよ。食べていい？」

彼女が私に耳に触れた。ビクッと反応してしまう。私は耳に触れられるのが苦手なのだ。

「ちょっと!! もうセクハラ禁止だよヒナ。でも、誉めてくれてありがと」

そんな会話をしながら私達は、町外れの廃墟にたどり着いた。

静まり返った雰囲気、錆びた立入禁止の看板、人気はまったくなかった。

「ふう……なんか水辺の匂いがするね……ねぇヒナ、近くに川とかあったっけ？……ヒナ？」

ピンと空気が張り詰める感覚。

いやそれよりもまずヒナの姿が見えない。予兆があった訳ではない。そう、気がつくと、いきなりヒナが消えたようなそんな感覚だ。

私は急激に怖くなった。微かに震える身体が止まらない。

「ヒナ、どこいるの!!」

私は辺りを探した。

その時、どこか遠く聞こえる叫び声のような物を認識した。それはヒナの声に聞こえなくもない。

「まさか……この中に……」

ガラクタのお城のような廃墟。誘い込まれるかのように、私は侵入した。

――――――――――――

そこは寂しさや懐かしさを感じた。昔の生活感が残るそこは、伽藍堂（がらんどう）という言葉を思わず使いたくなる。

私は廃墟の城に恐怖を感じながらも奥へ奥へと入り込んでいった。

大きい建物、研究施設と住宅施設が合わさったようなその建物に着いた時、たしかに聞こえた。

「こっちだよ」

私は駆け出した。

その建物の地下一階へ階段付近で見つけたのは、ヒナが愛用しているヘアゴムだった。

「ヒナここにいるの？」

地下一階は薄暗かったが、一番奥の小部屋だけ開いているのがわかる。

私はゆっくりとその部屋へと足を進めた。

「むむうぅっ!! うむむぅぅぅむぅっ!!」

「ヒナ!!」

彼女はそこにいたのだ。何故か柱を背に手を頭の上にした体制で立っている。

近づいてわかった。

彼女は柱に手を回し手錠で繋がれ、足も同様に同じタイプの手錠で拘束されていた。

さらに黒い布で目隠しをされ、口には白い布を噛まされ猿轡をされている。

「ヒナ、ヒナ!! 大丈夫!?」

手錠は無理だったのでひとまず目隠しと猿轡を外した。

彼女の小さな口からは、たくさんの布切れが見えている。おそらく声を出せないように詰め込まれたのだろう。

私はそれを取り外した。彼女の唾液を含んだそれは、ずっしりと重く、それを見たヒナも申し訳なさそうな顔を浮かべた。

「ぷはっ……はぁはぁ、ユワー怖かったよぉ。あっ……あたしの?んでた布、唾液いっぱいで手が汚れちゃったね、ごめんね」

「バカ、そんな事気にしなくてもいいのよ、それよりも……」

手足に鈍く光る手錠は、ヒナにがっちりと装着され、とても無理やり外せるような物ではない。

「手錠ってさ、好きな人の前でプレイとしてなら辛くないけど、今は窮屈だしちょっと怖いよね、アハハハ……」

この状況でも彼女はユーモアを忘れない。しかし猿轡で呼吸がしにくかったのか、顔が紅潮している。笑う顔だが目には涙が。その不安が私の胸にヒシヒシと伝わってくる。

私は彼女をそっと抱きしめた。

「大丈夫だよ、ヒナ。これから手錠を外すための道具探してくるよ、色々残ってたから多分なんとかなると思う」

「うへへーユワあったかい……うん、ありがとう。アタシの命、ユワに預けるよ」

「命って、大袈裟なんだから。じゃあ行ってくるね」

名残惜しかったが早くヒナを助けてあげるため、小部屋を後にする。

「アタシ囚われたお姫様みたいだね」

「私もお姫様がいいな」

「じゃあ、一緒に捕まっちゃう？」

「そうだね、ヒナと一緒なら、縛られても怖くないかもね」

嬉しそうな彼女を笑顔に見送られ私は廃墟探索に戻った。ポソリと呟いた彼女の一言には返事が返せなかったけど……。

「なんか水の匂いが濃いね、雨でも降ったのかなぁ……」

――――――――――――

研究棟らしき建物。

三階まで見回った時、私はようやく倉庫を見つける事が出来た。中を確認するとそこは、学園の教室くらいのスペースに荷物が散乱している。年月こそ感じられたがまだ使用可能な工具類もあった。

「せめて、手錠の鎖を切れれば……ん？」

不意に違和感を覚えた。

ヒナは、拘束されて猿轡までされていた。声を出せないようにされていたのだ。

「私の聞いた『こっちだよ』って何？」

疑問は次々に沸いてくる。

だけどそんな小賢しい推理は、一気に消え去った。

不意に出口に視線を合わせるとそこには、信じたくないモノがいた。

それは筋骨隆々にしてオイルで照りが出てる身体。着ているのはパンツのみ。何故か顔には紙袋をすっぽり被り、眼の部分だけくり抜かれ、手には錆が出ている鉈を持っている。

一言で現すならそれは……

「へ、変態ボディビルダー!!」

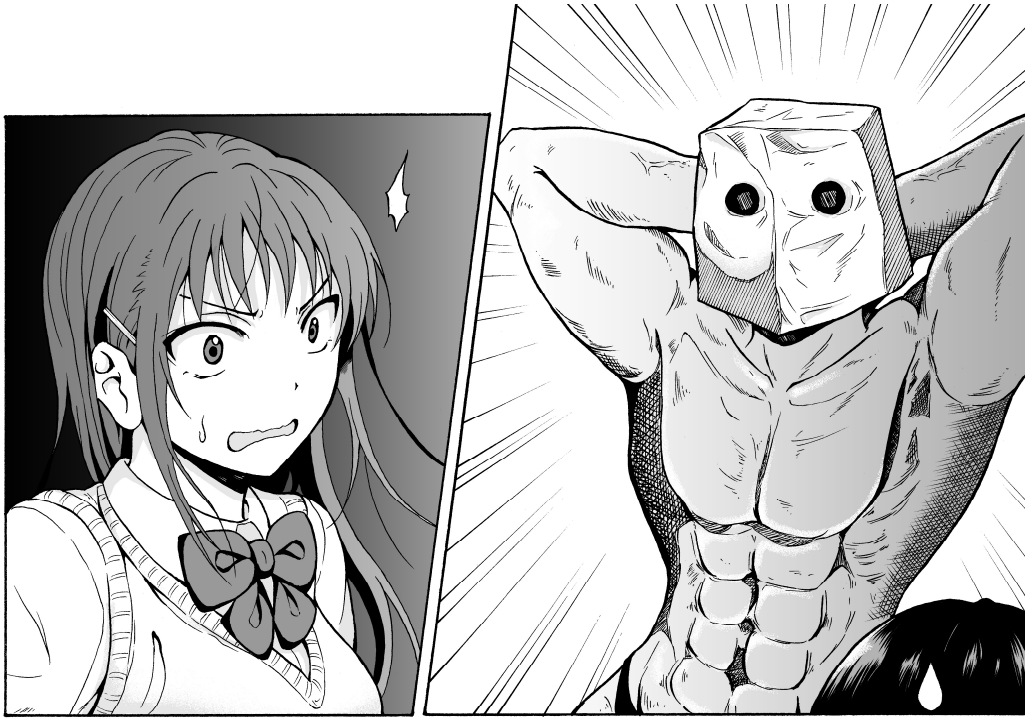
恐怖にかられ、出口へと走り出したがグイッと左手を捕まれた。手元に引き寄せられた後、口を手で塞がれ身体を押さえつけられた

「んんっ!! んんんぅぅっ!!」

私はなんとか抜け出そうと身体を必死でバタつかせたが、それを静止するかのように錆色の鉈が首元に当てられた。

「ううん……」

私の手足からは力が抜け、ダラリと垂れ下がった。



鉈男は、丁重に私を扱いつつも、丁寧に私を縄で縛り始めた。 手を後ろ手で組まされ縄を巻かれる。そのまま胸にも縄が掛けられ上半身が動かせなくなった。必要以上に肌に食い込んだり痛みはないが拘束具合は強い。

「いや、そんなに……きつくしないで……」

足首と膝に巻かれた縄は、私が身をよじってみても緩む事がなかった。

「んっ……くっ……窮屈だよ」

手足を拘束された私を少し観察したトコロで鉈男は話しかけてきた。

「お嬢さん、私はあるモノを探してイマス。一つお聞きしますが、何か変わったモノを見ませんデシタカ?」

私は咄嗟にヒナの事を思った。こいつの目的は何かわからないが、それが達成されたらヒナや私は最悪殺されてしまうかも知れない。

「め、目の前にいる変態以外は覚えがないよ」

「それは僥倖(ぎょうこう)デス」

鉈男は嬉しそうな様子で、いきなり私の口にガムテープを貼り付けた。

「むむぅ!? む、うむむぅぅ、むぅー!!」

そして鉈男の両手にはブルブルと震える機械やウネウネと動く半液体のような生物を取り出した。

「色々とお話を聞きたいので、少し素直になってクダサイネ」

「むむー!! むううー!!」

私の声はガムテープによって遮られ、呻き声が響くだけだった。

鉈男は機械を私の恥部に入れ、生物を胸へと落とした。生物はまるで身体に溶け込むかのように見えなくなる。しかし、生物の感触は胸から背中、そして下半身へと薄く薄く広がっていくのがわかる。

そしてヴヴヴヴ……と低い作動音。

「んむぐぅ!? む、むむ、ぐぅぅむぅぅ、む、むぅ、ぅぅぅむぐぅぅ!?」

恥部からの振動が否応なく伝わる。頭に痺れるような感覚が呼吸を乱し、少しずつ身体が熱くなる。

身体に広がった生物は、胸や脇腹をくすぐるようにそっと刺激を与えてくる。

「ん、ん、んぅ、んんぅぅ……」

（や、ヤバい、これは……頭がおかしくなりそう……）

気がつくと鉈男の姿は無く、私は部屋に放置された。

（ここで逃げ出さないと、ヒナも危ない……でも……んっ、あっ……これは拷問だよぉ……）

外は雨でも降っているのだろうか、空気の違いを強く感じつつ、私の縄抜けとの格闘は始まった。

「んっ、んぁむむぅ、うむぅぅ……んっ、むっ、むぅっ……んっ!!」

（息が……なんとか口のテープだけでも……）

床に口をこすりつけて、ガムテープの端をなんとかめくろうとした。

「んんぅ、んんぅ……んん？」

その時、段々と機械の刺激が弱くなっていくのを感じた。元々バッテリーがなかったのか、それは今までに比べ、身動きが取れるレベルの弱さになる。

「ん!! むっ、むぅ、むむ……」

少しずつ少しずつガムテープを剥がす。

「ぷはぁっ!! や、やった、はぁー苦しかったぁ……」

ガムテープと機械からの戒めが解けたので、なんとか手足の縄を解こうともがいた。

緩んでこそなかったが、拘束に隙間が出来始めたため、希望が生まれた。
「はぁはぁ……くっ……あぅっ、いたぁ……ヒナ……待っててね……」
私は忘れていた。薄く広がるアイツの存在を。胸に膨らみを感じ、さらにはニーソックスの中を伝わり足の甲や爪先にもそれを感じる。
「くっ!? くひゃぁっ!? う、うそ、マジでやめっ、あ、あっ、あはははは……ちょ、待って待ってぇぇ!!」
生物は私の胸を揉むように、そして乳首に集まり刺激を与え始めた。足に集まった部分は、まるでくすぐるかのように触り始める。
「や、にゃめて、あっ、あんっ……うぁっ、あはは、くすぐったいって、んんんっ、あんっ、あ、い、イクから!! それ以上はイッちゃうから!!」
くすぐったさと敏感な刺激が同時に来る拷問のような時間。
「あ……あんっううぅ……うむんっ!?……やめ……て……ヒナぁ……」
胸と足、そして生物が恥部に最後の刺激を与えた時、私の意識は遠くなった。

「おねいちゃん、大丈夫？」

高めの声だ。

目を開けるとそこには、フリルがたっぷりとあしらわれた洋服、ゴシックロリータと呼ばれる服をきた子がいた。

「こんなトコロで寝てたら風邪引くよ、じゃあね」

その子は、それだけ言うと部屋から出て行った。私は疲弊した身体をなんとか起こすと違和感に気付いた。

「足の縄が解けてる……それにアレは……」

部屋の出入り口近くに小さな鍵が落ちていた。私はそれがヒナの手錠の鍵だと直感的に感じた。

「よくわからないけど、今の子が足の縄を解いてくれて、鉈男が手錠の鍵を落として行ったのかな」

ひとまず私は、後ろ手で鍵を回収してヒナの元へと急ごうとした。

ビクンッ

急ぐ私を止めるように生物は未だ、私に寄生し刺激を与えている。

「ちょっと待って!! 後で、後で遊んであげるから!!」

ピクッと動きが止まる。
「そ、そう、いい子だね、今友達助けるから、それまで待っててて、ね？」
ピクッと返事するかのように動く。
（意志の疎通がとれたんだ……）
驚きつつも、ヒナの元へ急いだ。その時、ふいに嗅ぎ取ったモノへの疑問はすぐに消えてしまったが。
「ん、この匂い、まただ……雨、ううん、水の匂いがする……」

手は縛られたままだったので、バランスが取りづらかったが、なんとかヒナのいる部屋までたどり着いた。
「ユワ!? な、なんで縛られてるの？」
「は、話は後にしよう。ねぇ、限界まで手を下げてくれる？」
驚くヒナを落ち着かせ、私は後ろ手に持った鍵を手錠へと差し込んだ。カチャリと音が響くとヒナは急いで拘束から抜け出し、自由になったその手で私を抱いてくれた。
「ヒナぁ、こわかったよぉ」

「うんうん、もう大丈夫だよ。もしかしたら……足の手錠も同じ鍵で開くかも知れないから試してみて」

ヒナは言われるまま、足に嵌められた手錠に鍵を差し込む。またカチャリと音がなり、ヒナの嬉しそうな顔がとても心に響いた。

「待っててね、今、ユワも解いてあげるから!!」

長い時間、不自由な態勢で身体が痛いはずなのに、彼女は私の縄を一生懸命解きにかかってくれた。

「ねぇ外って雨かな? 帰り道濡れて帰るのやだなぁ」

「うふふ、そうだね」

日常を感じさせるヒナとの会話に私は安堵する。同時に少しずつ自由になっていく身体の感覚に身をゆだねていた。縄が少しずつ緩むと身体に血が巡り始め、体温が上がっていくのを感じる。そしてゆっくりと緊縛による痛みを認識し始める。

「んっ……んっ……ぁぁっ」

唐突に恥部からの刺激に声が漏れた。忘れていたが私の中には、アイツが、半液体の生物が身体に残っているのだ。縄からの解放感とそして刺激が私の心と頭の中を、どうしようもない熱混じりの衝動に襲われた。

「ユワ？だ、大丈夫？」
「う、うん、大丈夫だよ……実は……」

私は先程、上階で襲われた出来事を簡単に説明した。

――――――――

「なにそれ、ひどくない？」
私の話を聞き終わったヒナの眉毛はピクピクと引き攣らせ怒った。ヒナも柱に縛り付けられるとか、結構酷い目にあっているというのに。
「とりあえず、ここから脱出しよう」
私は出口に視線を向けた。そこには小さな人影が映る。
少女だ。あの上階で私の縄を解いてくれたロリータ服を着た少女がいたのだ。
「あ、あなた……よかった無事だったのね。ねぇ、ここに悪い人がいるから、一緒にいこう、ね？」
私は手を差し伸ばそうとしたが、それは意外な声でかき消された。
「ユワ駄目だ!! それは、違うよ!! その子からは水だよ、水の匂いがするよっ、よくわから

ないけど離れて!!」

後ろからヒナの叫ぶ声。

次の瞬間、グッと首元に衝撃走った。あの少女の手が私の首元を掴んだ。信じられなかったのが少女の位置から私まで数メートルはあるのに、その少女は手を文字通り伸ばしたのだ。よく見れば、右腕は身体にめり込み短くなり、その分左腕を伸ばしている印象。人間とは思えなかった。

「かはっ!?」

呼吸がまともに出来ず、息が無理やり吐き出される。苦しい。

「ユワ、今、助けに……」

「動かないで茶色のおねいちゃん。この黒髪のおねいちゃん、どうなってもいいのなら別だけどね」

ヒナの動きが止まる。私は絞りだすように声を発した。

「ヒナ、逃げて」

それが精いっぱいだった。だが数十秒ほどの時間が経った時、諦めたヒナが、悔しそうに唇を噛んで視線を落とした。

「じゃあ、茶色のおねいちゃん。黒のおねいちゃんに手錠を掛けてあげて。後ろ手がいいかな」

酷く気が進まない足取りで先程、自らが掛けられていた手錠を拾い上げる。普段見たことのない暗い表情で私の後ろ手に手錠を掛けた。拘束による恐怖や不安よりも、ヒナの苦しそうな表情の方が辛い。

「次は黒髪のおねいちゃんの足にこれを巻いて上げてね」

少女はとても楽しそうな様子でガムテープを一巻きヒナに投げ、ヒナは黙ったまま、私の両足首を揃えガムテープ巻き始める。足の拘束が終わった時点でようやく私の首から少女の手が離れた。

「ゲホッ、ゲホッ……クッ……」

「ヒナッ!!」

崩れ落ちるように倒れる私をヒナは抱きかかえてくれた。その眼には涙が滲んでいる。

「じゃあ、その柱まで黒のおねいちゃんと一緒に移動してね」

「ねぇ、なんでこんな事するの？アタシ達、アンタの事いじめたりしないよ、だから縛る必要なんてないんだよ？」

ヒナの言葉にニンマリと凶悪な笑みを浮かべた少女には、先程までの可愛らしさは微塵も感じなかった。

「ああーん？そんな事言う余裕あんのかよ、テメーらはよぉ。いいから、オレの言う事バカみたいに聞いてればいいんだよ」

口調まで変わり、ヒナの首元に手を伸ばし首を締め始めた。

「カハッ!? い、いや、やめ、やめてぇ……」

「お、お願い、いえ、お願いしますやめてください、言う事は聞きます。今だってその子は、アナタの言う事を聞いて私を拘束したでしょう!?」

ギリギリミシミシと肉が軋む音がする。

ヒナの意識が飛ぶ直前、フッと少女から解放されたヒナの顔色はとても青ざめていた。

「ヒナ、大丈夫？」

「ケホッ、ケホッ……大丈夫、大丈夫だよ……」

「じゃあ今度はーー」

少女はまた元の様子に戻り、楽しそうに指示を出す。

「茶色のおねいちゃん、自分の足にテープを巻いてね」
もう私達は少女の言う事を聞くしかなかった。
体育座りになったヒナは自分の足首にテープを巻きつけ始める。途中少女からの指摘もあって、それは自力では解けないほどに固く何度も巻きつけた。
「立ち上がって、オレに背中を向けて、自分で手錠をかけてね」
両足を縛ったので立ち上がりにくそうだったが、それでもヒナはなんとか立ち上がり、自ら手錠を掛けた。
「よく出来ました。ちょっと休んでていいよ、色々準備があるから。あ、逃げようとするならしてもいいけど……あんまりオススメしない……ん、アレ、黒髪のおねいちゃん……」
何かに気づいたのか、ジロジロと私を見回す少女は、またニンマリと凶悪な表情を浮かべた。
「へぇぇぇ……このご時世にそんなモノを仕込んでるなんて。誰だか知らないけど良い趣味してるなぁ……クックックッ……」
そして、少女は変わった事を言いだした。
「おねいちゃん達、ちょっとキスしなさい」

「キスって言っても、フレンチキスじゃなくてもいいわ。ただし唇にね」

私達は顔を見合わせた。この子が何を言ってるのか理解出来なかった。ただ、断れば確実に危害が及ぶ事がわかっていたため、少し時間が掛かったが私達はそれに従った。

「ヒナ……ごめんね」

「ううん、アタシ、ユワなら別にいいよ」

お互い手足を拘束されているので、もぞもぞと身体を近づけた。胸と胸が当たり、そして顔が密着するくらいまで距離を詰めるとお互いの息の音が大きく聞こえる。彼女からは香水の香りと微かに汗の匂いが混じり、それが私を刺激する。とても愛おしい想いにかられた。

「んんぅ……」

「んぅ……」

触れた唇はとても柔らかい。あぁもっと欲しい。もっと……もっと……。

手が使えないので、お互いの身体を支える事が出来ないず、バランスを崩し倒れ込んでしまう。私が下敷きになり彼女が上になる。そしてまた優しい時間が始まる。

「んん……ぷはぁっ……へへ、ごめんねユワ。こんな時なのに……すっごく……とても……」

「ううん……いいの……私こそ、ごめんね。でも……もう少し、欲しい……」

再度、ヒナの唇が当たる瞬間の事だった。

ドクン、ドクンと心臓が高鳴り、そして今まで感じた事のない衝動を全身で感じた。

「ああっ……あ、う……あぁぁうぅ、あああああっ!!」

「ゆ、ユワ!? どうしたの!!」

アイツだ、アイツの仕業だ。私は直感的に思った。

鉈男より仕込まれたあの生物が私の中で暴れてるのだ、それも快感を感じるように激しく。

「あはははは、ようやく目覚めたのね。まったくお寝坊さんだこと」

「なに、なによ、ユワに何をしたの!?」

「オレは何もしてないわよ。ただその子の身体にはね、その昔、一部の人間が使った秘術が施されてるの。オレはそれを起こすきっかけを与えただけ。といっても、きっかけは、おねいちゃん達のキスだけどね」

「秘術？」

「そう黒髪のおねいちゃんの身体には、ある生物が住み着いてるの。正確に言うと半透明な海月（くらげ）の古代種ね。触手も毒も持たないそれは人の身と混じると恥部を中心に半寄生を始めて、宿主の快感を刺激するのよ。その海月は細胞分裂によって増えるから、寄生する宿主を増やすため性感を刺激するんでしょうね」

「アンタがやったんじゃ……ないの？」

「オレはこんなまどろっこしい事はしないわ。平安ぐらいかな、陰陽師に伝わる媚薬の秘術って事になってるけど、今時ね」

そう言うと少女は部屋から出ようと踵を返した。

「ちょ、ちょっと待って!! ユワをどうすれば……」

そして三度、底意地悪い、今日一番の凶悪な笑顔でこう言い放った。

「火照った身体は諌（いさ）めてお上げなさいな。そのまま放おっておくと、快楽で人格が壊れるかもね。後、面白そうだから手足はそのままにしておいて上げるわ。あはは、あまりに気持ち良くて暴れるから丁度いいのかもね」

｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜

「くっ……ああっ、んきゅんっ……はぁはぁ……」

感情がそのまま身体の熱さになったみたいだった。

頭の中は、欲しい気持ちと切なさと……ヒナへの申し訳なさでいっぱいだった。

「ヒナぁ……こんな私を……見ないでぇ……」

「ううん、大丈夫だよユワ、私がなんとかして上げるから」

寝転がる私に添うようにヒナは近づく。そして先程と同じように……いや、さっきよりも熱く感じる唇が触れた。

「ん、くぅ……」

「んんぅ……ふぅ、ユワ、もう少し辛抱しててね」

ヒナはそう言うと私のブラウスに顔をうずめた。何をしてるのかと思ったがボタンを口で一つづつ外している。そしてフロントホックのブラジャーも同じように外し、私の乳首に優しく触れた。

「んんあぁっ、ヒナ、ひなぁ……」

「んっ、んっ、んんっ……はぁはぁ……へへ、気持ちいいかな」

ヒナを抱きしめたい。

そんな衝動に駆られたが後ろ手の手錠がガチャガチャと邪魔をし、足首のガムテープは私をいやおうなく締め付ける。

「手錠が邪魔だよぉ……」

「うん、アタシもだよ」

つつっーとヒナの舌が私の胸の間を滑らせた。衝撃が頭を揺らし続ける。

ヒナの舌は私の胸に到達し、優しく舐め続けた。時々胸を吸われる度に頭がおかしくなりそうになる。

「今出来る、精一杯の事してあげるね、多分これで少し楽になるはずだよ……たぶんね」

もう私は身動きをしたくないくらいには疲労していた。身体は熱いままだし、呼吸も苦しいし、でもヒナに甘えていたかった。

「ユワ……」
ヒナは私の耳を噛んだ。
「ひゃんっ!? や、も、もう……だめ、だめだめ……もう……い、いっちゃ……」
「うん、少し休もうね」
ヒナの舌が私の耳をねぶり出した時、私の意識は途切れた。

――――――――――

――――――――――

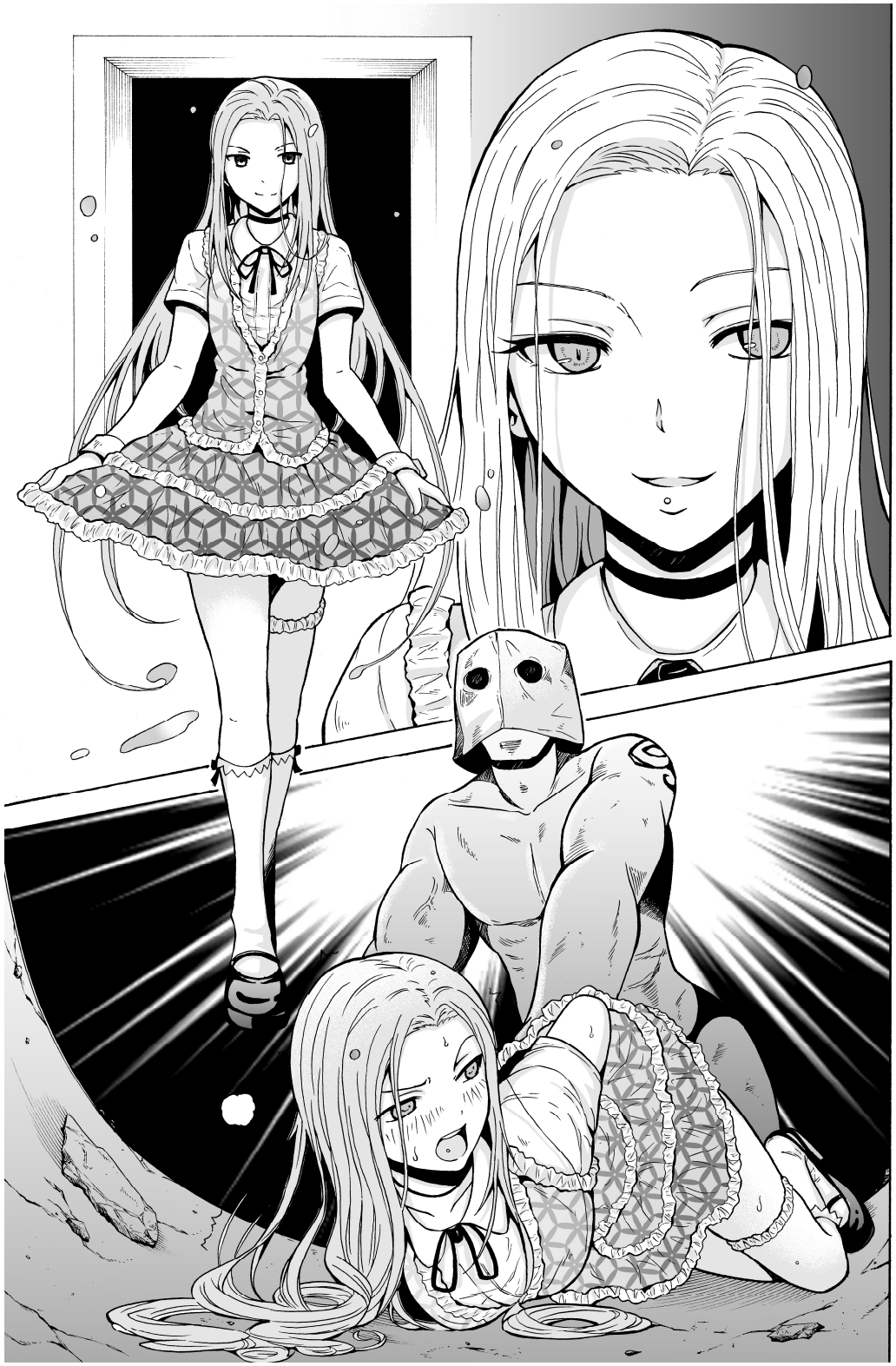
「これからどうしよう……」
ユワは私の隣で寝ている。寝息がとても可愛い。疲れていたのだろう、その眠りはかなり深い。普段であればそれはまだ微笑ましい若気の至りとかでごまかせるのだろうけど、未だにアタシ達の手足は拘束と非日常の中にいる。
「縛られてる女子校生二人とはとても絵になりマスネ」
にゅうっと出入り口から現れたのは、あの少女ではなかった。

紙袋を顔に被った変態だった。アタシは嫌味も込めて大きなため息をついた。
「はあぁー、狂気なゴスロリ少女でもうお腹いっぱいなんだけど」
「ＨＡＨＡＨＡ、元気の良いお嬢さんだ。そちらの方といい勝負デスネ」
「アンタ……ユワを縛って、わけわかんない生物を仕込んだ犯人でしょ」
「ほほう、正解です。鉈男と呼ばれてイマス」
「安易なネーミングね」
普段ならこんな怪しいヤツがいたら、パニックになるのにこんな自然と会話してるなんて、どうやら私は感覚が麻痺してるらしい。
「ねぇ、相談があるんだけど……」
アタシはダメ元で鉈男に助けてくれるように懇願した。鉈男は首を捻ったけど、条件付きでそれを承諾してくれた。言ってみるものだ。
「それでその条件って……」

｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜｜

「おねーちゃん達、どこぉだあぁぁあーー!!」
少女の狂気の声がする。

上層階にいるアタシにも聞こえるそれは、怒りに満ちている。
ダン、ダン、ダン……足音が近づく。そして
「みぃーつけたぁぁぁーー」
血走り精気に満ちた眼は、常人とはかけ離れていた。
妖怪というモノがいたのなら、きっとこういうモノなのかも知れない。
アタシは恐怖を押し殺し、じっと耐えるしかなかった。
少女が部屋に入った時、私は部屋の柱に立った状態のまま縛り付けられていた。もちろん身動きは取れない。
「黒髪のおねいちゃんはいないけど、まぁいいわ。まず茶色のおねいちゃんから」
グンッと腕を伸ばし、指を伸ばし、アタシの顔をわしづかみにする。
「あははは、い・た・だ・き・ま・す!!」
歪んだ笑顔のまま、近づける少女。その顔がアタシの視界を支配した時、私はその顔に唾を吐いた。
「ぎゃあああ……お、おねいちゃん……なんで、それを……」
弱りペタリと座った時、そばのダンボールに隠れていた鉈男が縄を持ち現れ、そして少女の身体をギリギリと縛り始めた。



「な!? なんだ、誰だお前はっ!! こ、こんなモノでオレを縛りきれると……な、なんでよ、力が入らないわ!? やめ、やめろっ……んぐっ!? むぅ、むうううぅぅ!!」

鉈男は、少女の手足をがっつり縛り上げ、黒い布で目隠しをし、その口には白い布で猿轡を噛ました。不思議な事にあれだけ常人離れしていた少女は、もがいてはいるものの、抵抗が出来ずに次第に大人しくなっていった。

―――――――――――――――

「元川の都市伝説の正体はこの少女デス」

鉈男はなにやら梱包作業をしながら、淡々と話してくれた。

この元川の廃墟が出来る前には大きな川が流れていたと言うそんな話から始まった。

「この子の正体は河童の成れの果てデス。頭に皿こそありませんが、両腕の骨が繋がっているので片方を短くすると、もう片方が長く使えマス。また人間の唾液に弱いというのも特徴的デス。ちなみにこの猿轡もアナタがさっきまで噛まされていた布デス。たっぷりと唾液を含んでいるおかげでこの河童の動きを封じてイマス」

「この時代に河童とか妖怪ってどうなのよ?」

「確かに。しかし、怖い目にあったんじゃないデスカ？明らかに人間ではない何かに襲われた経験は貴重かと思いマス」
「二度とごめんだけどね……これからその子どうするの？」
「私の住処に連れていきマスヨ。アナタの言うように妖怪も住みにくくなってますカラネ、保護も兼ねて……ネ」
拘束した少女を箱に詰め終わり、鉈男はゆっくりとこちらに向いた。
「さて、約束の時間ですが準備はオッケーデスカ？」
鉈男はアタシに条件を提示した。
アタシが望んだのは危険の原因である河童の少女を封じる事、そしてユワとアタシが無事にこの廃墟から脱出する事。
そのために鉈男が要求した条件はこうである。
私は女性が縛られもがく姿が見たい、それを満たしてくれるのであれば、脱出出来るように計らう……と。
「ねぇ取り敢えず、この縄は解いてくれない？ちょっと制服直したいんだけど」
「えぇ、もちろんデスヨ」

シュルシュルとアタシと柱に巻き付いていた縄が緩む。河童の少女をハメる計画だったが餌役のアタシの拘束はもう少し甘くても良かったんじゃないかと思う。なんかずっと縛られっぱなしだ。

本来、縛られてる状態は異常な事なのに……。

手首を交差させてみたり、両足をしっかりと揃えてみたりし、つかの間の自由を楽しんだ。

「おや、逃げないんデスカ？」

手足が自由になったアタシに冗談を言う鉈男。逃げられる訳がない。言い方は悪いが今のユワは鉈男の人質になっているようなモノだ。アタシの知らないトコロに監禁されているのだろう。

「鉈男、そのジョークはセンスがないわ」

「ＨＡＨＡＨＡ、ごもっともデス」

アタシは部屋にあった鏡を使い身だしなみを整え始めた。

髪を結び直し、はだけたブラウスやスカートを整え、ルーズソックスも履き直した。これからまた縛られて、乱れるのがわかっているのに自分でも笑ってしまう。

「その重ね履きしているハイソックスがルーズソックスからちょこっと見えるのイイ感じデスネ」
「可愛いっしょ」
「大好物デス」
「チッ、変態男め」
そして鉈男は、私を腕を掴みグイッと後ろ手に捻った。
「あたたた……ちょっと女の子は優しく扱いなさいよ」
「強気な女の子は好きデスヨ、興奮シマス」
後ろで組んだ両手に縄がシュルシュルと音を立てて巻き付き始まる。手が後ろで固定された頃、縄は胸に到達し膨らみを強調するようにギュッと固定される。胸の上下に縄が巻かれ、脇の下を通る縄に閂（かんぬき）と呼ばれる縄留めが施された辺りでアタシの上半身は動けなくなった。
「くっ……なにこれ、さっきまでと全然違う」
予想よりも強固な緊縛にアタシは戸惑ったが、鉈男はそんな事を気にも掛けずに作業を進めた。シュルっと縄が股を通った時に微かな刺激を感じた。
「あ……うんっ、あ、そんなとこまで……」

股縄が施され手を動かしたり、上半身を動かす度にその刺激が恥部に伝わる。

鉈男に座らされ、両足を揃えられ足首を中心に縛り始めた。せめてもの抵抗で足をバタつかせてみたが縄の拘束はそれすらも封じた。ルーズソックスにはしっかりと縄が食い込んでいる。

「あ……ちょ……んんっ……くすぐったい……」

膝を縛り、そして太ももに縄が打たれた。下半身が真っ直ぐな棒のようになった感覚。縄が軋む度にギシギシと音が鳴るがそれでも強い痛みはなかった。

「はぁはぁ……手足、また縛られちゃった……はぁはぁ……これ……で……終わり？」

だがまだ終わらなかった。

鉈男はアタシをうつ伏せにし、足を背中へと折り曲げた。そして足首と後ろ手の縄目を別の縄で繋ぐ。逆エビのような体勢のまま固定されたのだ。聞いた事があったこれはホッグタイとか言う拘束方法。

「かぁ……くぅぅっ……鉈男これ……苦しいよ……」

「お嬢さん、とても魅力的デスヨ。まだ仕上げが二つ残っていますがね」

そう言うと鉈男は、ペットボトルの取り出した。ラベルなどは取り外されており、なにやら半液体なモノが入ってる。

「なにそれ……ローション？ふん……やっぱり変態じゃん……ん、半液体……違う、それっ!! まさかっ!?」

「正解デス、これは黒髪のお嬢さんにも使ったスライム君です。私が品種改良と培養した自信作です」

「ちょっと待って、やだ、それやめっ……」

股縄の刺激などお構いなしに抵抗してみたものの、ホッグタイの状態では無駄な行為だった。

トプトプトプ……とペットボトルからスライム君は私の太ももの上に落とされた。不思議な事に濡れた感覚はなく、スライム君はスゥゥと乾いたように消え失せた。

だが次の瞬間、グンッと鈍い衝撃が下半身から頭へと貫いた。

「んぁぁぁっ、ちょっと待って、落ち着いて……あんっ」

そして仕上げとばかりに鉈男は私の口に結び目で瘤を作った布を噛ませ、鼻と口を覆うように別の布を被せる。私の口は強固に塞がれてしまったのだ。

「むぅっ、ううう、むんっ、むわぁんんん……んんっ、んぁぁっ!!」

私は股縄やスライム君による刺激で激しくもがいたが、それを遮るようにしっかりと緊縛され、強く動くとギシッと縄が音を立てる。手首と足首を繋ぐ縄がピンッと伸びきると全体の縄がギュッと締まりアタシの敏感な部分も否応無く責め立てる。

もどかしさだけが一層募っていった。

「さて、お友達との感動の再開をドウゾ」

鉈男は無造作に置かれていたダンボールを引きずり出したと思ったら、それを鉈で切り裂いた。中からは……

「むぅわぁぁっ!!（ユワッ!!）」

「むぃぃわあぁっ!!（ヒナッ!!）」

そこにはホッグタイこそされてなかったが厳しく手足を緊縛され猿轡を施されたユワがいたのだ。

「むふふふふ……あぁ素晴らしいデスネ、美少女と呼べる女子校生をこうして緊縛し、もがいてる姿を見れるとは、感涙モノデス」

「うううぅ……むぅ……」

「むううう、ううっ」

そして鉈男はこの状況に満足したのかいつの間にか部屋から消えていた。

残されたアタシ達は、この緊縛地獄からなんとか抜け出さないといけないのだ。

鉈男との条件には続きがあった。それは手錠などは使わず縄で縛るから、勝手に縄抜けして脱出しろという不可解なモノだ。最も先程まで命の危機にあったので、手段は選んでなられなかったのだけど。

ユワは不自由な身体をくねらせながらもアタシに近づいてくる。アタシもユワに近づくためにもがくがその度に縄が身体を締め付け、刺激で声が漏れる。

「んむうぅぅぅぅ!!んんっ……んっ……んっ」

這い寄るように近づくユワが寝転がるアタシの側まで来た時、猿轡を噛まされたユワの口が優しく触れた。

とても熱っぽかった。

|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|
|

「むうぅぅ……うんっ……うんっ……むぅぅ……」
「くぅぅ、むんっ……うんっ、むぅ……んんん……」
数十分は過ぎただろうか。
私達は、長時間もがいた結果、少しだけ縄目が緩み、ヒナのホッグタイを解く事に成功した。また猿轡も縛られた後ろ手を使い、なんとか解くことが出来た。そして背中合わせになる事で少しだけ休む事が出来た。
「はぁ……はぁはぁ、ユワぁ……んんっ……囚われてるお姫様気分で縛られるのって、結構苦しいんだけどぉ……」
「くっ……わかってる。もう少しで……んぁっ……解けるから、が、がんばろうヒナ」
そしてたっぷりと時間を掛けて、少しづつお互いの縄を緩めていく。
私の上半身に巻き付いていた縄が解け、残るは後ろ手に縛られただけになった。
「んんっくぅぅぅぅ……んあぁっ、や、やったよヒナ、解けたよ!!」
そして、自由になった腕でヒナの縄を解いてゆく。あの鉈男の変質的なまでに強固な緊縛は、解くのにとても時間が掛かった。
「あーようやく解けたぁ……ユワ……」
「うん、やっと終わったよ、ヒナ。もう都市伝説とかこりごりだからね」

後日談。

元川の廃墟は再開発のため、更地になった。私とヒナは、古株そうな工事員に元川の河童や都市伝説について聞いてみた。確かに河童の話は聞いた事があるが、それもかなり前のお伽話レベルだそうだ。

それよりも元川が廃墟になる前に流行っていた事件の方が有名だったかも知れないと。死傷者こそ出なかったらしいが当時妙齢の女性が次々と行方不明になる事件が相次いだらしい。数日後には無傷で戻り、いなくなった期間の記憶はないとの事。

ただ奇跡的に記憶が残っていた女性によると、筋骨たくましい紙袋を被った男に監禁されていたとの証言。それが独り歩きし、いつしか元川の都市伝説となったらしい。

「ねぇ、元川が街として機能してたのって、数十年前だよね。鉈男、歳食ってなくない？」

「うん、顔はわからないけど少なくともおじいちゃんには見えなかった。都市伝説ってアイツの事だったんだね……」

河童の少女と鉈男との邂逅（かいこう）は夢ではなかった。

何故なら私とヒナの身体の中には、あのスライム君とやら残っているからだ。少しづつ体外に排出されるという話だが、しばらくは残りそうだ。

不思議な事に身体が熱くなるのはヒナも同じで、最近は二人一緒に刺激を感じる。私の額に微かに滲み汗が一筋頬を流れる、ヒナを見ると少しだけ俯いたその顔はピンク色に染まっていた。はぁはぁと息が荒い。ヒナを見るとキュウと締め付けるように胸が痛む。

「ねぇユワ、ごめんやばい」

「うん……私も結構キツい、ちょっとしよっか？」

廃墟近くの山小屋風の建物に入る。

あれ以来、定期的に私達は身体を重ねている。身体の中のスライム君が時々暴れるからだ。

小屋に入った私達は唇を重ねる。

「ユワ……ユワ……んっ、あっ……はぁはぁ……あ、熱いね……んっ、あぁぁっ……」

「んんんぁ……わぁ……ふぅ……ヒナすっかり上手くなっちゃったねって、ハヒャン!? まだ耳は駄目だってばっ……もう……んんっ、ぬわぁ……ふふふ、イケない子だよね私達。でも囚われたお姫様だから仕方ないよね……ね、もういっかい……しよっ……」

「うーん、素晴らしいデスネ。やはり百合の花が似合うお二人は最高デス」

その言葉に私達は目を丸くした。

視線の先には、まるで玉座のように堂々と椅子に座る鉈男。側にあるテーブルには、縄やガムテープが嫌な存在感を放っている。

私こと、月村柚羽の都市伝説は、まだまだ終わりにはならないようだ。

≪了≫

あとがき

この度は『月村柚羽の都市伝説』をご購入頂き
誠にありがとうございます。

　ひなた古書堂 月見でございます。

　都市伝説をテーマに女子校生達が事件に巻き込まれるお話。
　これだけ書くとDIDというフェチの心がくすぐられます（笑）
　そういった趣味がない方には、縛られた女の子達が縄抜けでもがいている
　ちょっとエッチな声や掛け合いを楽しみつつ
　百合っぽい要素でも楽しんで頂ければ幸いでございます。

今作品には、一部性描写がある部分がございます。
どうぞご了承をお願い致します。
ご意見、ご要望などありましたら
　　こちらまでご連絡をお願い致します。
seasids.moon@gmail.com

ひなた古書堂　月見

◇イラスト　リョウゲツ
『Twitter』
https://twitter.com/ryogetsu3
『pixiv』
https://www.pixiv.net/member.php?id=7552764

○メッセージ
今回初めて同人作品に参加させていただきましたリョウゲツです。
イラストのお仕事も初ということで悪戦苦闘しましたが
なんとか描き上げることができました。
ボイスドラマを聴きながら私のイラストも眺めて頂ければ幸いです。
よろしくお願いします。

スペシャル・サンクス
◇文章校正・指導
田中 まさみ (小説家)

『オシリス文庫』作品紹介ページ
http://pc.hnovel.jp/search/author.php?author=WR006

『eロマンスjp』作品紹介ページ
http://eromance.jp/
search/author/?au=%E7%94%B0%E4%B8%AD%E3%81%BE%E3%81%95%E3%81%BF

『pixiv』
https://www.pixiv.net/member.php?id=2960611

『Twitter』
https://twitter.com/Tanaka86Masami

スペシャル・サンクス
◇表紙構成
マグロン

◇シナリオ・編集『月見　ひなた古書堂』

そして最後にこの作品を
　　手に取って頂けました貴方様に最大限の感謝を。

また次の作品でお会い出来る事を祈って。

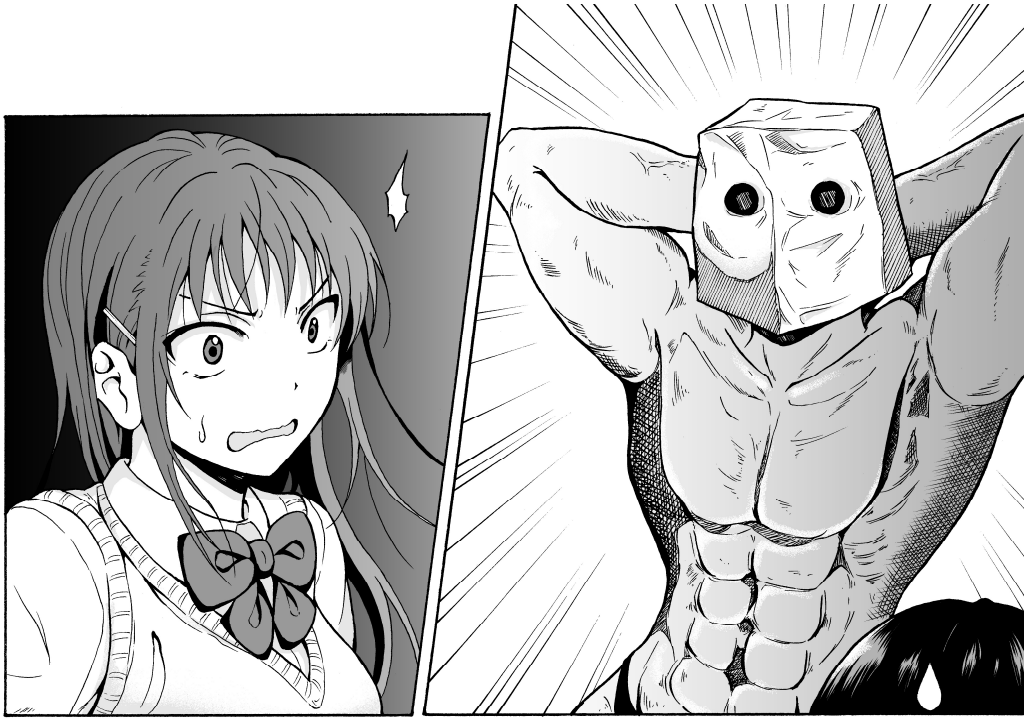
制作・著作　ひなた古書堂
http://hinatakosyodou.blogspot.jp/
(c)2017 hinatakosyodou.

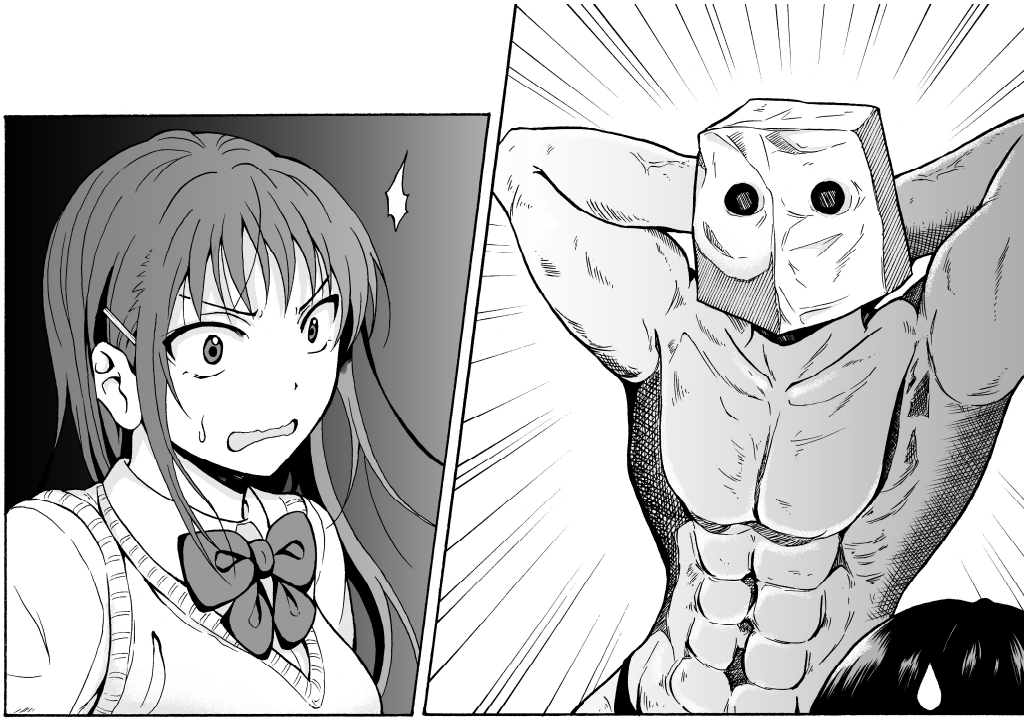
イラストギャラリー

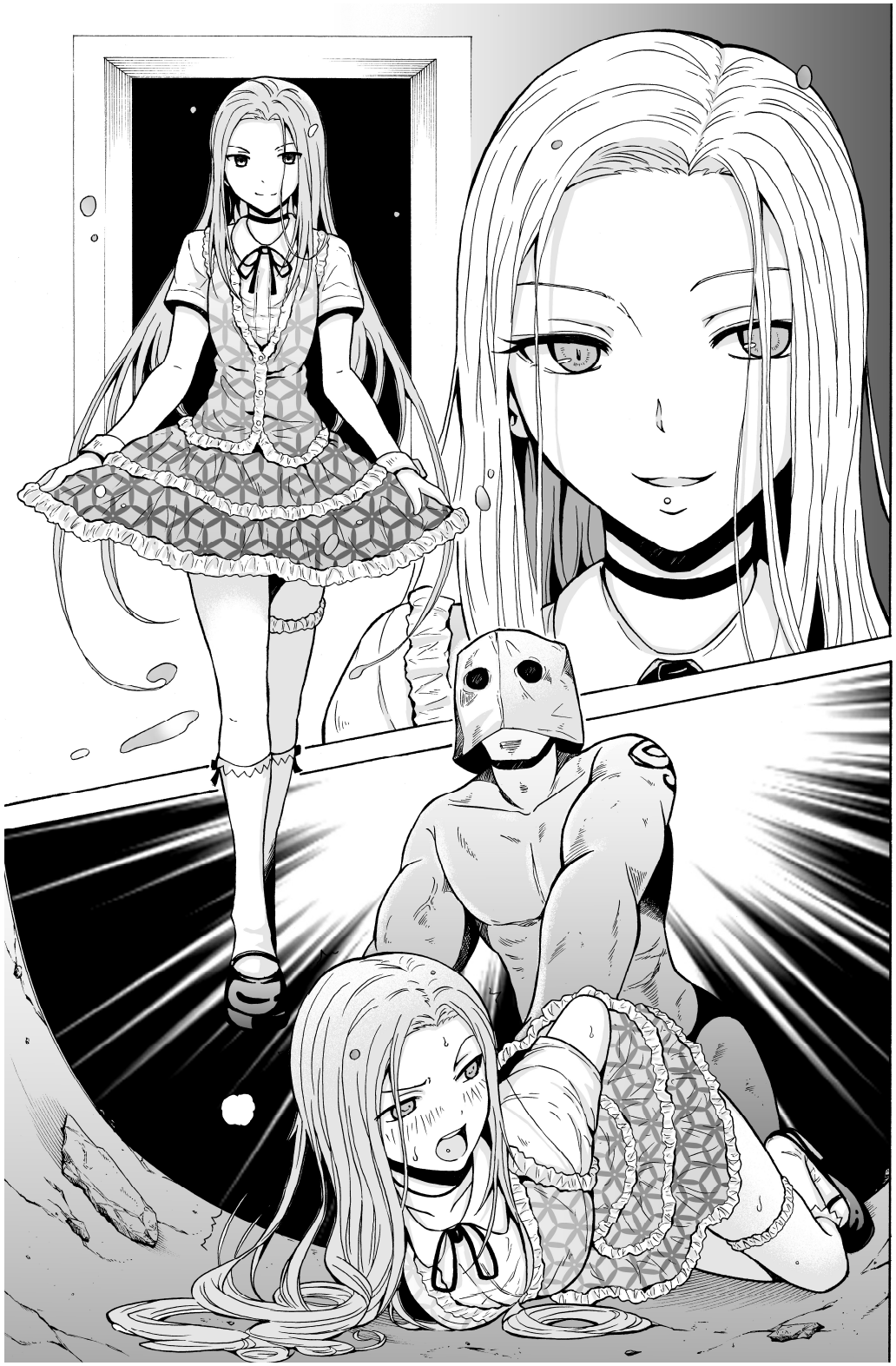
挿絵・作画担当リョウゲツ氏によるイラストをまとめました。
本編使用絵の差分、構図確定前のラフ画などをどうぞお楽しみください。

Scenario：月見
Illust：リョウゲツ
月村柚羽の都市伝説
CV
思ちぽ
山田じぇみ子
間宮恥太郎
前庭りす
ひなた古書堂/Project Urban Legend

Scenario：月見
Illust：リョウゲツ
月村柚羽の都市伝説
【PDF小説】

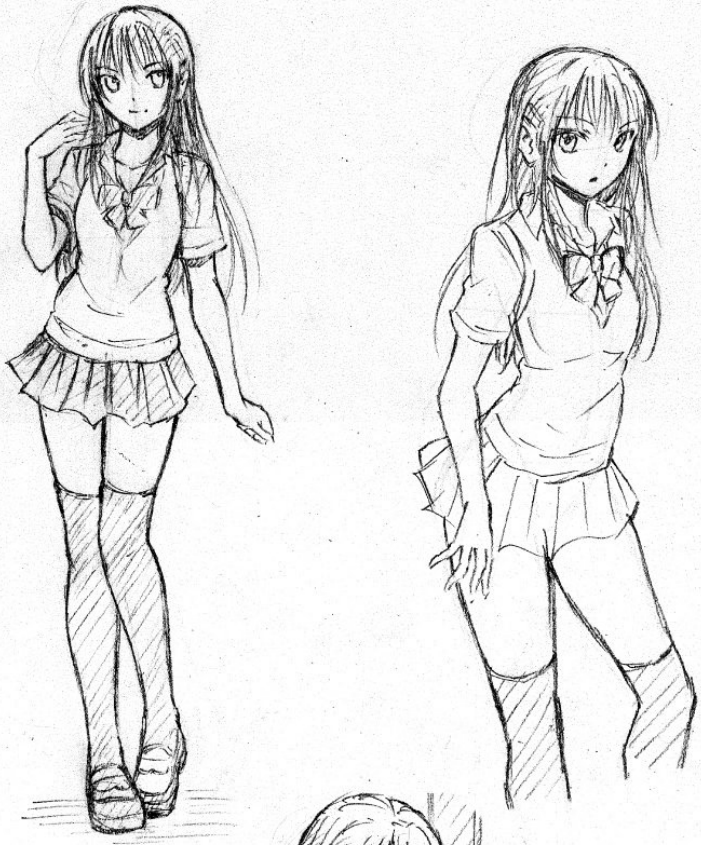






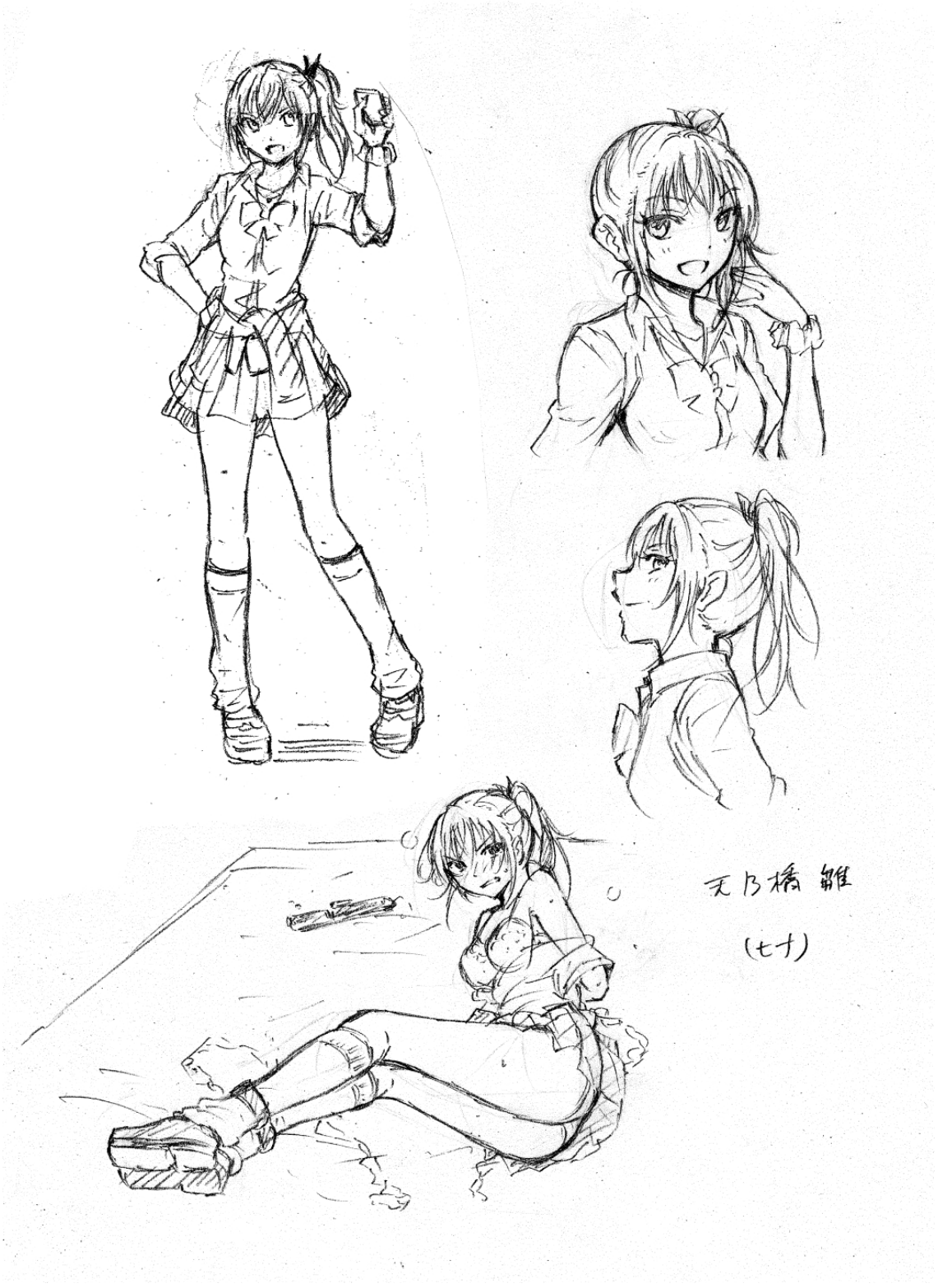
月刊 柚羽

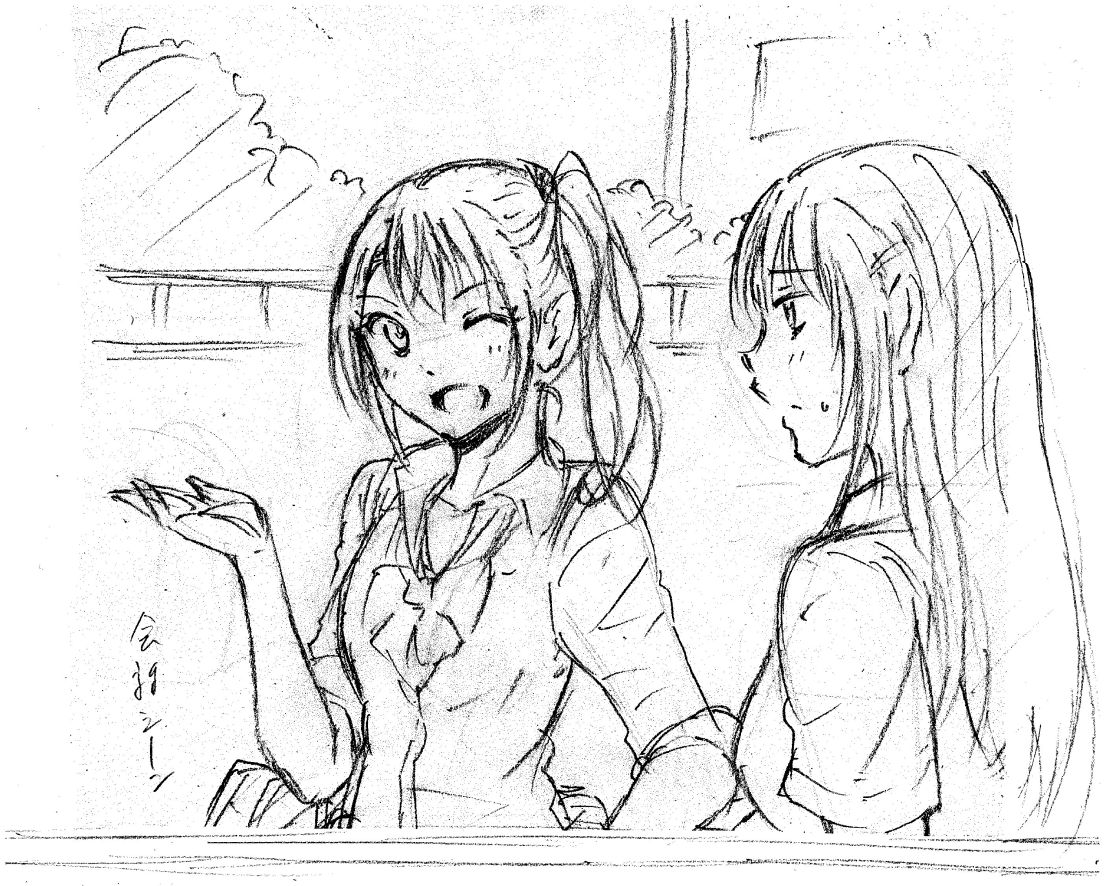
(ユ7)

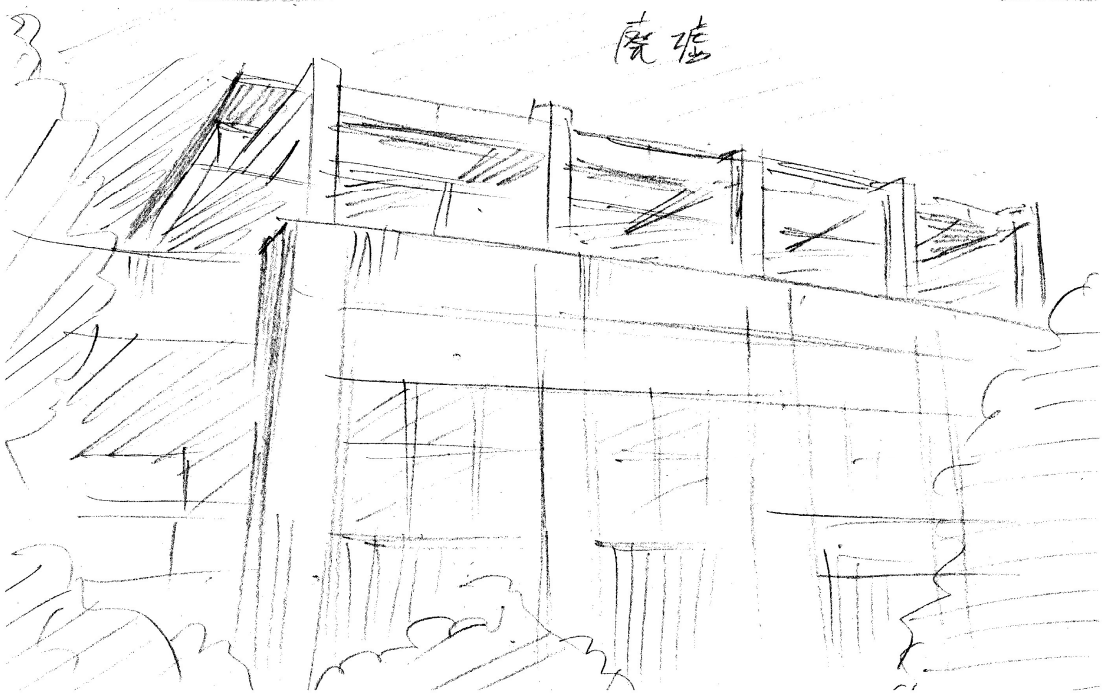


ユウ

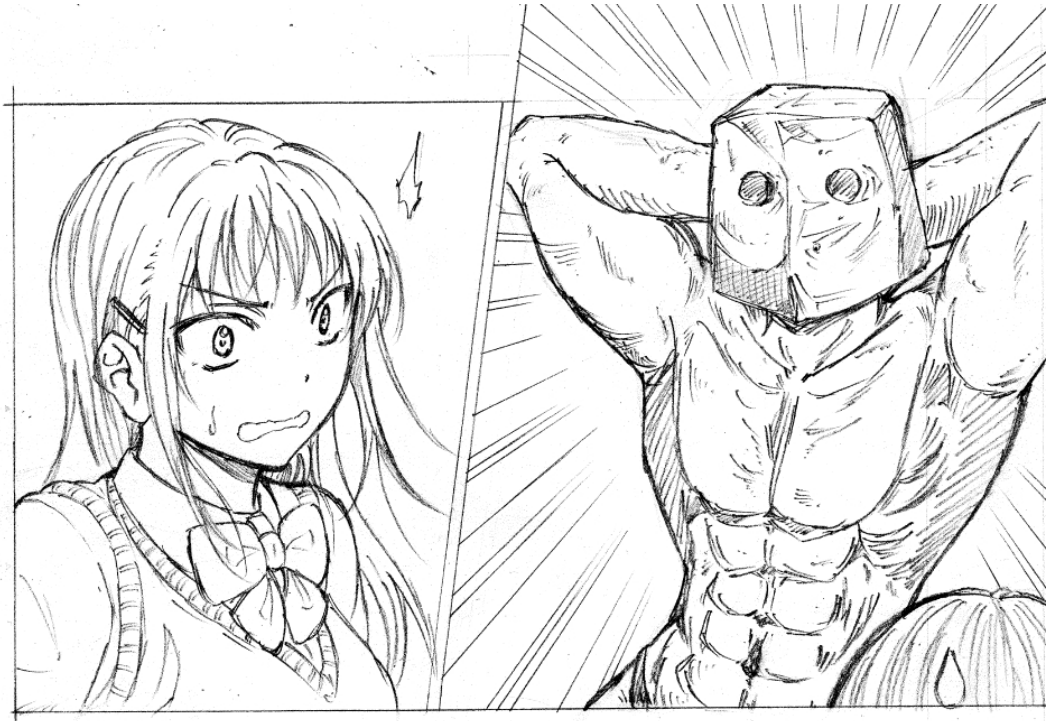
ニーソバージョン


天乃橋 雛
(七十)

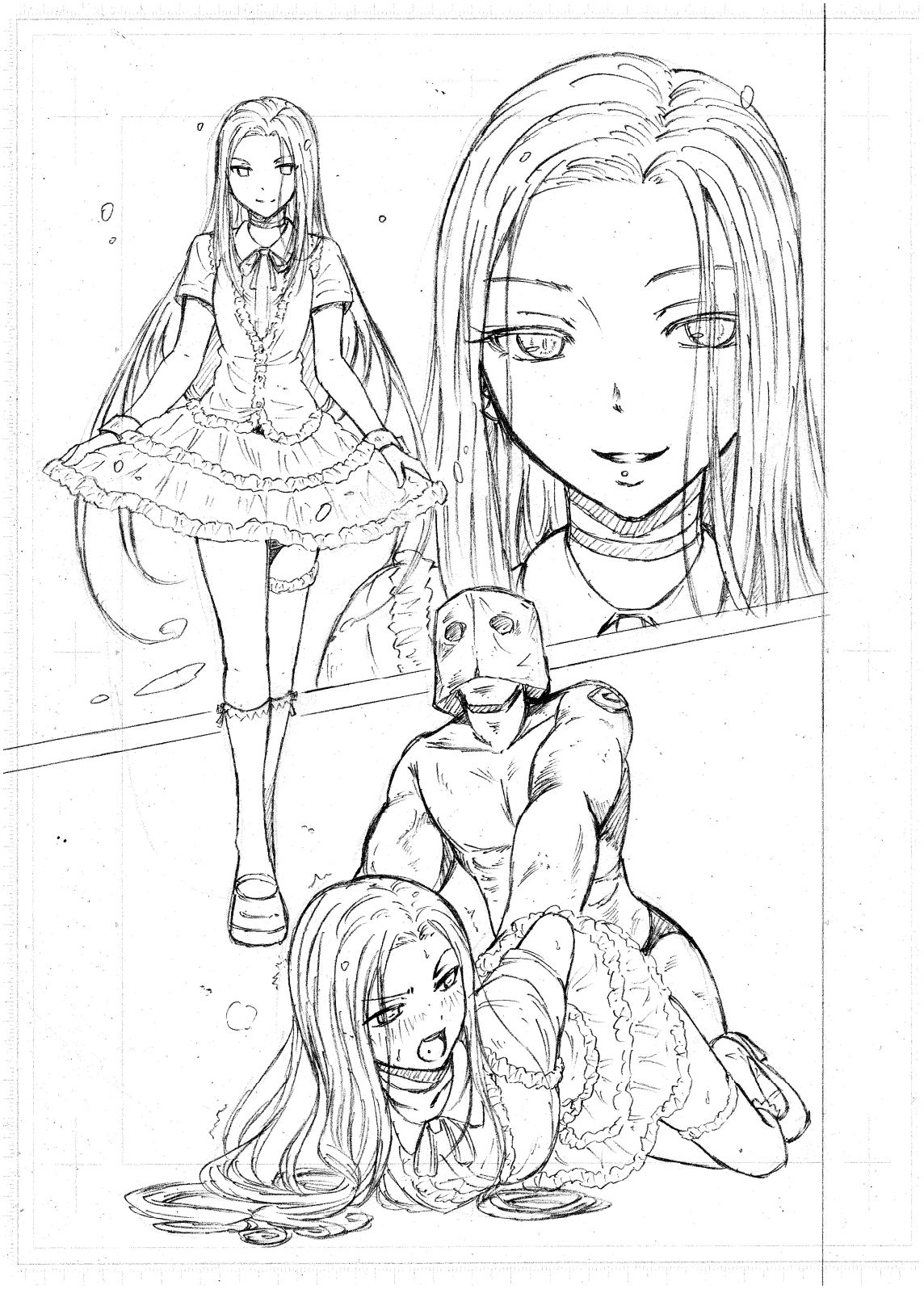

会話シーン

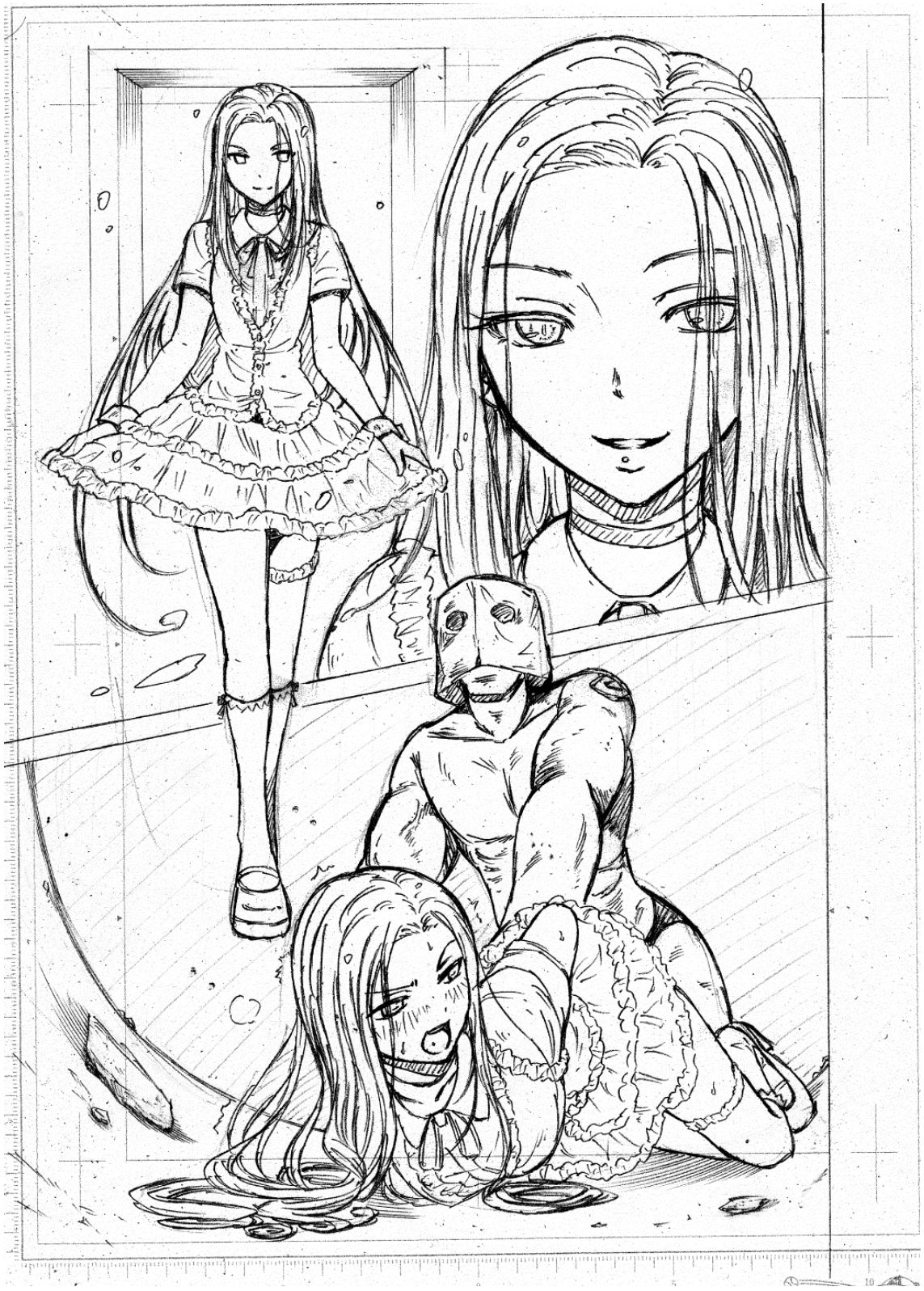

廃墟

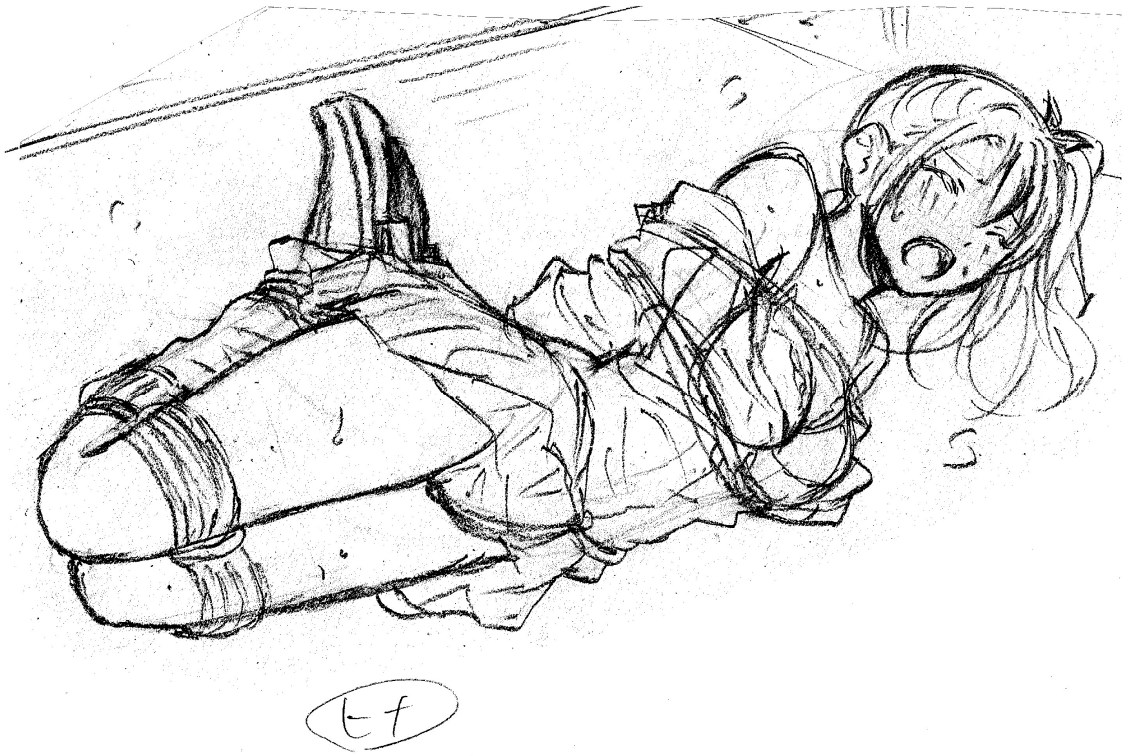
ニワ 緊縛シーン



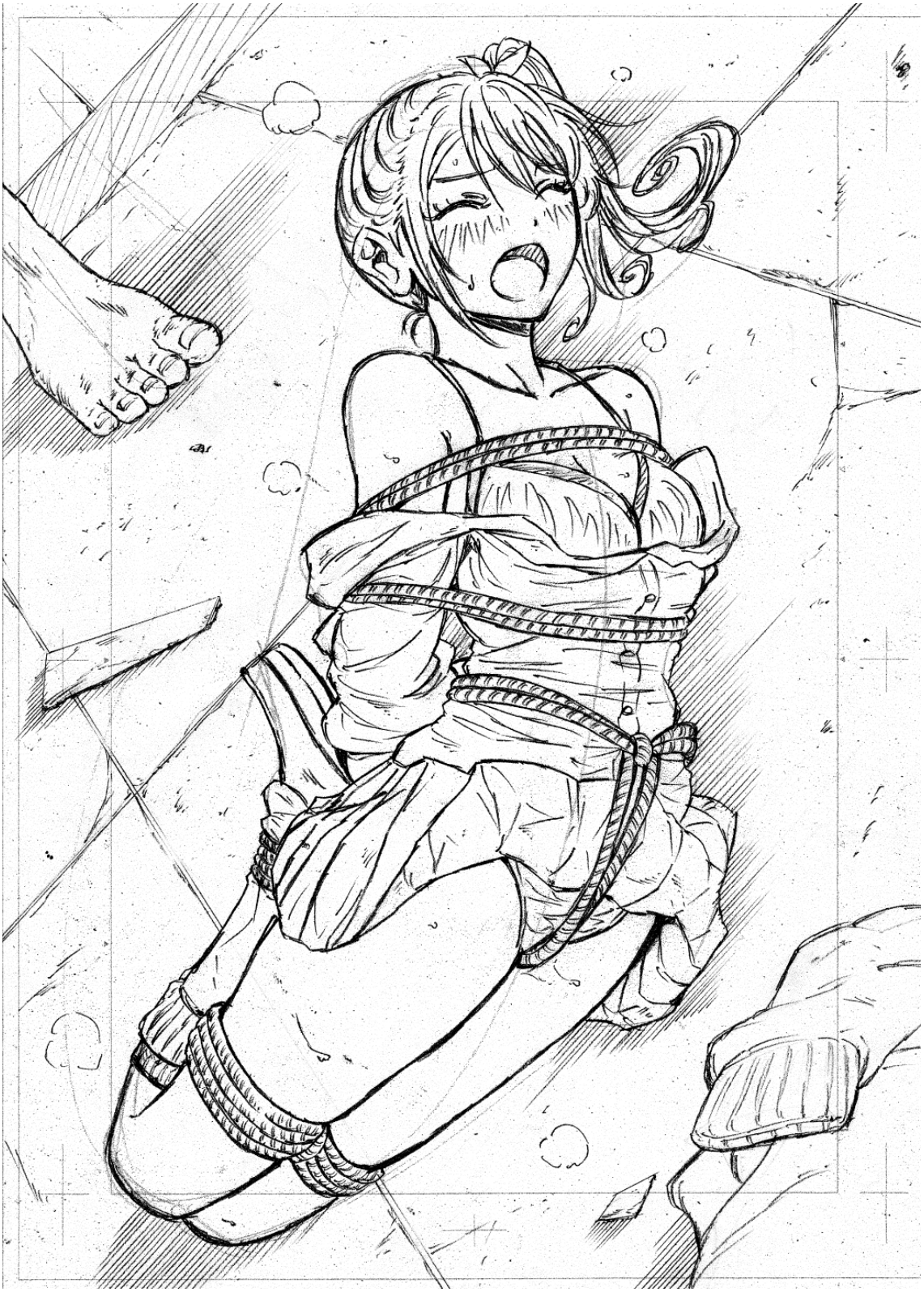
이
후

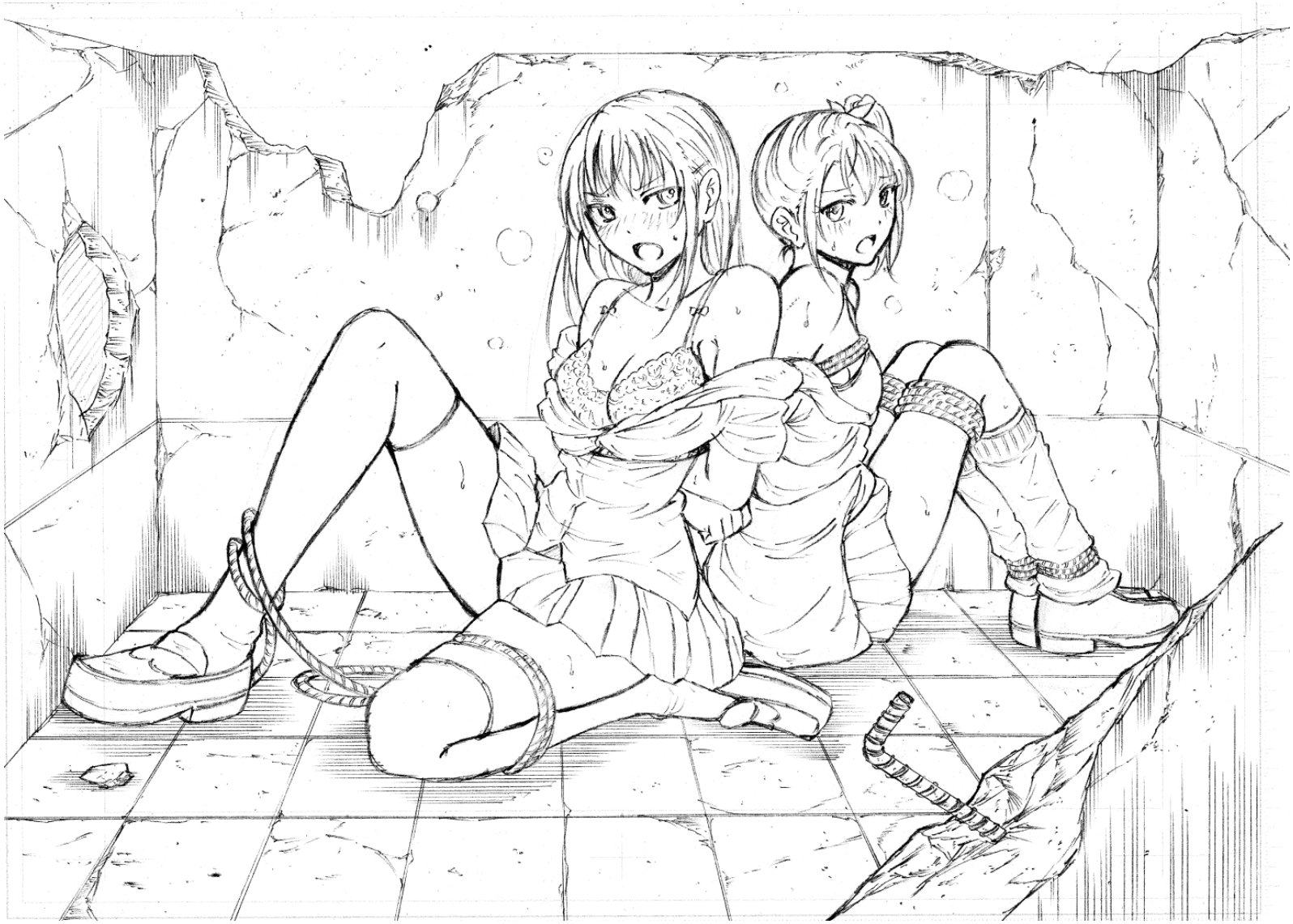





ヒナ

コウ ヒナ
連縛シーン





月村柚羽の都市伝説

二〇十七年五月六日公開
二〇十七年五月六日修正

著者　月見
挿絵・デザイン　リョウゲツ
装丁　マグロン
監修　田中まさみ
編集者　月見
校正　月見　ひなた古書堂

発行元　ひなた古書堂
http://hinatakosyodou.blogspot.jp/